



塚本祐馬

つかもと・ゆうま
株式会社ブレインマークスビジネスコンサルタント

大手化学品メーカーで法人営業を担当。「業績を上げつづける仕組みづくり」に心血を注ぎ、多くの業績を上げてきた。クライアントが素直に感じてくれる課題を特定し、仕組みを通じて解決することを得意としている。とくに経営計画書の作成やPDCAサイクルの仕組みづくりをベースにした支援スタイルは、クライアントから高い評価を受けている。



「住家の家」の施工例

10年後のためのアドバイス

御社は2003年に設立して以来、土木工事から建築、不動産、住宅分野などに事業を拡大してきました。そして、今はそのほかにも商業施設の収束運営事業やベッグ事業なども手掛けています。

住宅事業で注目したいのはやはり独自ブランドの「住家の家」です。建築家の及川洋樹氏と提携して展開しているこのブランドは、地元の風景を巧みに取り入れていることやデザイン、機能性が好評で需要にファンを増やしているそうです。また、同社は用地取得から住宅・施設の建築、外構施工まで一貫して請け負うことができるため、今後、地域インフラにかかわる総合的なビジネスを展開できる可能性も秘めています。最近では「住」を切り口に、まちのイベントや飲食事業への参入も検討しているそうなので、既存事業の強化・連携をはかることでさらなる躍進が期待できそうです。

小田 住宅にこだわったことではありませんが、スタッフ間でブランドイメージを共有できるかどうかが最初の壁になると思っています。

塚本 父上（小田公武社長）によると、御社のモットーは「地域の方々へ「住」という側面からアプローチし、創造的な暮らしを提供する」です。

小田 最終的には現在の事業の枠を超えて、まちづくりに貢献できるような取り組みを考えています。公共事業の仕事で培った知見を生かすのは、不可能ではないと確信していますし、そうすることで地元の若い人たちが集まってくれたらいいと思います。

小田 住宅事業は民間への仕事であり、お客さま一人ひとりの声をきくと聞き、それを反映することで顧客満足度の向上や価値創造につながっていくかなければなりません。「住家の家」はその精神を重んじたブランドで、地元のお客さまからいただく「景観に溶け込んだ家に住みたい」という要望を受けて立ち上げたものです。具体的には全国で空き家再生などに展開している建築家の及川洋樹氏と提携し、「瀬戸内海の穏やかな波」

塚本 父上（小田公武社長）によると、御社のモットーは「地域の方々へ「住」という側面からアプローチし、創造的な暮らしを提供する」です。

小田 最終的には現在の事業の枠を超えて、まちづくりに貢献できるような取り組みを考えています。公共事業の仕事で培った知見を生かすのは、不可能ではないと確信していますし、そうすることで地元の若い人たちが集まってくれたらいいと思います。

「澄み切った空」「緑豊かな山々」などの美しい風景に彩られた暮らしを提案しています。塚本 プラントづくりで苦労していることはありますか。小田 住宅にこだわったことではありませんが、スタッフ間でブランドイメージを共有できるかどうか

塚本 父上（小田公武社長）によると、御社のモットーは「地域の方々へ「住」という側面からアプローチし、創造的な暮らしを提供する」です。

小田 最終的には現在の事業の枠を超えて、まちづくりに貢献できるような取り組みを考えています。公共事業の仕事で培った知見を生かすのは、不可能ではないと確信していますし、そうすることで地元の若い人たちが集まってくれたらいいと思います。

塚本祐馬・ブレインマークスビジネスコンサルタント 御社は住宅分野のほか、さまざまな事業を展開していますが、もともととはどのような事業を基盤にしていたのでしょうか。

小田 塚本 祐馬・不動産・住宅・不動産

小田 笙汰郎

おだ・しょうたろう

株式会社 小田
住宅・不動産部 部長

1997年生まれ。山口県立田中高等学校を卒業。その後、広島の外構業者で現場監督として勤務。そのときに森下ではなく家づくりのあり方をも考えるようになった。2020年に父が経営する御社に入社し、オリジナルブランド「住家の家」の事業部長に就任。



10年後をリードする 未来企業

135

土木、外構、建築分野などに事業を多角化 総合的な提案を強みにまちづくりを推進!!

山口県田布施町を拠点に総合建設事業を手掛ける御社。海岸河川工事や道路工事といった公共事業を請け負うかわら、住宅分野で独自ブランドを展開するなど多角化をはかっている。とくに最近では建築家と提携した独自の注文住宅ブランドが目玉とされているという。さっそく、同社の住宅事業を主導する小田 笙汰郎氏に、御社ブレインマークスの塚本祐馬氏にこれまでの経緯や展望について聞いた。

小田 高松市の頃から庭づくりが好きで、卒業後は専門学校で2年ほど専門知識や実技を学びました。その後、別の会社で現場監督を経験してから、父が経営している御社に事業承継を視野に入れて入社することになりました。

小田 最初は何かに身体を動かすことが楽しかったのですが、いろいろな現場を担当するなかで庭づくりの奥深さを知ることになりました。やりがいを感じることが多くなりました。たとえば、当社では先述したように土地選びから住宅、外構までを一貫して手

塚本 父上（小田公武社長）によると、御社のモットーは「地域の方々へ「住」という側面からアプローチし、創造的な暮らしを提供する」です。

小田 最終的には現在の事業の枠を超えて、まちづくりに貢献できるような取り組みを考えています。公共事業の仕事で培った知見を生かすのは、不可能ではないと確信していますし、そうすることで地元の若い人たちが集まってくれたらいいと思います。

部部長。当社は土木工事からスタートし、その後、庭の外構工事、さらに建築、土壌・建物探査へと事業領域を広げていきました。その原動力となったのは、お客さまの要望に応じた庭づくりを追求するなかで「そこに住む人の暮らしをトータルにサポートしたい」という気持ちが大きくなってきたことでした。



社内研修の様子